

# 山と博物館

第43巻 第2号 1998年2月25日

大町山岳博物館



ミズバショウ

撮影 松元 智子

春を前に

松元 智子

日に日に日差しが暖かくなり、アルプスの山々が霞み始めるといよいよ春が来たのだと感じられます。日頃あまり計画性のない私もこの時期ばかりはセツブンソウ、フクジュソウ、カタクリ、ミズバショウ等々、これから訪れる花の季節に向けて、カレンダーと向かい合うことになりました。

近頃、カタクリ、ミズバショウの群生地など花の名所を紹介する雑誌が増え、開花期にあわせてまちおこしのな花祭りが各地で開催されるようになり、たくさんの人々が花を求めて訪れています。なかには観光バスで名所巡りをするツアーを見かけたりもします。幸いにも私はちよつと足をのばせば名所を訪れることができ、この時期、週末を待ってはいそいそと出かけています。それとは別に、自分だけの名所探しと称して、宛もなく野山を歩き、人知れず咲く花々を見つけては喜んだりしています。

四国の平野部に育った私にとって春を告げる花と言えはなんといっても満開の桜でした。ところが長野に移り住み、山を出歩く機会を持つようになると意外なことに、桜の圧倒的美しさよりも、残雪の中にはつんと咲く小さな花に春の訪れを感じるようになり、また、いろんな花が季節を追い時期をずらして咲く様子に、以前よりもより細やかに季節の移り変わりが感じられるようになりました。もちろん四国には四国なりの季節を追った花々が咲いており、今さらながら故郷らしい春をもっと堪能しておけば良かったと残念にも感じています。

それにしても、何気なく訪れた春の林で見つけた一株の可憐な花に、訳もなく心が高ぶり、その日一日満ち足りた気分が過ぎることを幸せに思う今日この頃です。

(株総合環境研究所)

# アルプスに翔けた小伝令使(その二)

## 父・三田旭夫の夢と中部山岳鳩協会きよくお

三田 啓一

### 一、山岳鳩—小伝令使の誕生

旧式の十六ミリフィルム映写機がカタカタとせわしない音をたてながら動きはじめる、フィルムにできた傷のために多数の光の筋が走っては消えるセピア色の画面に、昔懐かしい登山電車が登場。電車の動きを追うカメラの視野に、今から六十年前の信濃大町駅が浮かび上がってくる。アンティークな服装と重装備に身を固めたひとりの登山者が降り立ち、駅長に道をたずねる。駅長は慣れた手つきで間近に見える中部山岳鳩協会の三階建ての建物を指差して教える……。標題「小伝令使」の映画はこうして幕を開ける。鳩の訓練の様子などを伝える場面に続くこの映画のクライマックスは、一群の登山隊が大雪渓をトラバースするシーンに始まる。天候が急変し、にわか強風とガス。突然、一人の登山者が滑落。これを見て仲間達が見事なグリースード



信濃大町駅から中部山岳鳩協会を望む

で彼を追うが、とても追いつかず、滑落者は不運にも頭を岩に打ちつけて負傷、人事不省に陥ってしまった。仲間達は遭難者を慎重に安全な場所に移すが、さて、これからどうしたものか。幸いこの登山隊は通信用の鳩を携えていたので、早速S・O・Sの通信文を鳩の足につけ、救援を求める切なる願いを彼女に託し、鳩へ最後の頼みをしてアルプスの空高く放った。鳩より先に、

同行していたガイドを急を告げるべく山麓に向かって走らせたが、人の足ではどんなに急いでも五時間はかかってしまうだろう。……彼女—小伝令使と愛称されたかの山岳鳩は、登山隊の願いに見事に応えてくれた。途中で鷹の襲撃を受け

て翼をやられ、鮮血で通信筒まで赤く染めながらも、放鳩からわずかに十五分で彼女は懐かしの我が家、中部山岳鳩協会の鳩舎に辿り着いたのだ。S・O・S。八月十五日、午後一時発。天候、荒れ模様。隊員の一人が雪渓へ墜落した。重傷。東の方へ降りる積りだ。案内人を先発させた。至急救助を頼む。通信文は、鳩係↓

うか。ここで彼自身の述べるところに従って、伝書鳩による山岳遭難救済事業を開始した目的、真の意図を追ってみよう。『貸伝書鳩事業目論見書』(昭和十年八月、中部山岳鳩協会創立事務所編・発行)に次のような記述が見受けられる(同書、十頁〜十三頁)。

本部長↓警察署へと伝達され、直ちに医師を含む救援隊が編成される。救援隊が通信文に記された遭難現場に向かって山深くわけ入った時、前方に鳩より先に出発して駆け下って来たガイドを発見。一行は、ここから現場へと引き返すことになったガイドを先頭に立てて先を急ぐ。

近年、各登山施設山小屋、登山道、登山はす等ノ整備ト登山団体ノ健全ナル発達ハ、鐵道省ノ登山客誘致宣傳ト相俟ツテ逐年登山者ノ激増ヲ見、昨年ノ如キ北ある不ノニテ其數實二十萬ニ及ベリ。昨今流行ノはいきんぐ山岳登山ノ權權トナリ、又本年ヨリ北ある不ノ中部山岳国立公園ニ指定サレシ等自他共ニ旺盛ナル登山機運ノ促進シテ、アル現状ナリ。然ルニ翻ツテ、山岳ト地元或ハ登山者家庭ヘノ通信機關ヲ願フニ、僅カニ上高地ノ夏設郵便局、富士山麓太郎坊ノ投函箱、目下計畫中ノ燕岳山頂、燕山莊ノ夏設電話線ノ數種アルニテ、依然舊態ノ儘放置サレ居ルニ過ギズ。一方登山者ヲ送り出シ家庭ノ無事歸還マテ、萬一不幸時ヲ氣遣ヒ山ヨリノ便方如何ヲ待タレル事カ、又登山者シテモ久シク待望ノ山岳ヲ征服セシ時、山小屋又キヤンヨリ此爽快ナ欣ビラ家庭ヘ如何ニ通信シタキカハ吾人ノ想像以上ナリ。

こうして仮のベッドが設置され、医師の厚い治療を受けることができた遭難者は何とか一命をとりとめることができたのであった。

此一事ヲ忘却シテ發達シテ、アル現今ノ山岳施設、重大ナ片手落チトモツキベキカ。而シテ此欠陥ノ指摘コソ本事業創始ノ着想ニ外ナラズ。即チ、一羽ノ傳書鳩携行ニヨリ、山頂ヲ極メテ時其他機宜ニ應ジ、家族又ハ知人ヘノ通信ハ至極迅速ニ行ハレ、切望シテ容易ニ解決スルノミナラズ特ニ不幸ニテ危險遭難又ハ怪我、急病等ノタメ救助ヲ求めル場合等ハ、將ニ最速ニテ一通信手段ヲ、更ニ最迅速ノ場合、従来ノ遭難救助作業ガ三分ノ二乃至以上ノ日數ヲ遭難地點ノ搜索ニ費シ居リシヲ思フ時、今、一羽ノ傳書鳩ヨリ遭難地點ヲ明確ニシ得タレバ、如何ニ救助隊ノ努力ヲ節約シ、且有效ニ使用セラレシカ! 此處於テ本事業ノ山岳遭難防止、人命救助ノ社會的使命ヲ提唱スル所以ナリ。

手元の資料によると、セミドキュメンタリー「小伝令使」は昭和十三年七月に撮影を開始し、同年十一月に完成している。私の父・三田旭夫が、自ら運営して

いた中部山岳鳩協会の山岳鳩による山の遭難救済事業を世間に広く報じ、遭難防止に役立てたいとシナリオを書き下ろし、当時の著名な映像作家であった塚本閔治氏にメガホンをとっていただいて完成させた作品であった。『本事業ノ洋々タル前途ヲ語ル……』と述べてはいるが、最初はまったく何もないゼロのところから出発し、たったひとりで民間人の立場から、そしておそらくは中・長期的な現

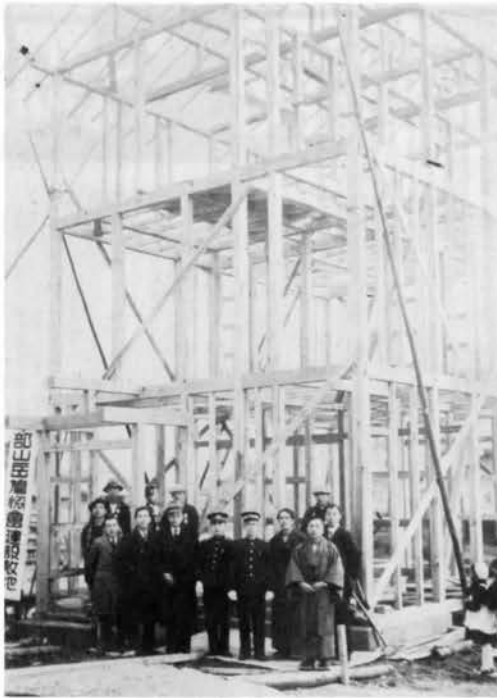


山岳鳩通信の架

日本アルプス  
山岳鳩通信の架  
昭和十三年七月、中部山岳鳩協会が主催する「小伝令使」の撮影現場。この映画は、山岳遭難救助のための通信手段としての山岳鳩の活躍を描いた。撮影は、当時の著名な映像作家であった塚本閔治氏にメガホンをとって行われた。この映画は、山岳遭難救助事業の重要性を広く世に知らせるために制作された。この映画は、山岳遭難救助事業の歴史を伝える貴重な資料として残されている。

1	山岳鳩通信の架	10分
2	山岳鳩通信の架	10分
3	山岳鳩通信の架	10分
4	山岳鳩通信の架	10分
5	山岳鳩通信の架	10分
6	山岳鳩通信の架	10分
7	山岳鳩通信の架	10分
8	山岳鳩通信の架	10分
9	山岳鳩通信の架	10分
10	山岳鳩通信の架	10分
11	山岳鳩通信の架	10分
12	山岳鳩通信の架	10分
13	山岳鳩通信の架	10分
14	山岳鳩通信の架	10分
15	山岳鳩通信の架	10分
16	山岳鳩通信の架	10分
17	山岳鳩通信の架	10分
18	山岳鳩通信の架	10分
19	山岳鳩通信の架	10分
20	山岳鳩通信の架	10分





中部山岳協会の上棟式

川から移り住み、結婚した妻の幸子との間に一男二女をもうけるとともに、この地を最初の拠り所にして右にみた伝書鳩の事業に取り組みることになる。

伝書鳩の事業から撤退を余儀なくされた後の父は、第二次世界大戦中のほとんどの日本国内の人びとがそうであったように、家族の一日の糧を得るために畑を作ったり荒地を開墾したりと、その日その日をしのぐのが精一杯であった。そして昭和二十年に敗戦となりもったときびしい食糧事情に置かれる毎日となったわけだが、多分そのような日常の中でも父の頭の中には戦前の伝書鳩の事業の再開という夢が常に絶えることなくあったのかも知れない。何故それが実現しなかったのか今となっては計り知れないが、その夢が全く違った分野で実現することになる。これも何時から父の中で具体的な計画となり実現に至ったのかはわからないが、昭和二十七年頃北海道で乳牛の種畜改良のために牛のザイメンを鳩により輸送するという試みにとりかかり、或る程度実用化に漕ぎつけたのだが普及するに至らなかった。その理由は、多分寒冷地の故と思うが定かではない。しかしこれに懲りずに多分種々検討の結果、同様の事業を伊豆七島の新島で再度試行するところまでもっていった。昭和二十八年から二十九年頃にかけて新島で実際に(多分、本土の畜産試験場と新島の間で)伝書鳩により乳牛のザイメン輸送を何ヶ月にもわたって行っている。ところが新島でも事業として本格化することなく終わっているが、その間の事情についてはやはり詳らかではない。

そのうちに父は体調を崩し家にこもることが多くなった。長い闘病生活を経て昭和六十年にこの世を去るまでの晩年は、地域の交通事情の改善などに積極的にかかわり、信号

がないためその実現にはあらゆる手段を講じて多方面に働きかけたようである。私の記憶の範囲でも軍に伝書鳩(軍用鳩)の私下げ運動を展開したり、どのような手段を使ったのかはわからないが財政的には三井、三菱、住友などの財閥を動かし、一番長く援助を続けて下さった森村義行さんにも御縁ができたように思う。またマスコミも動員して、有名な登山家で共同通信の記者でもあった松方三郎さんに親しくして頂いたのはじめ、鳩協会には始終信濃毎日の記者も出入りしていたように思う。そして鳩協会の実務の協力者として実際に鳩の飼育に当たったのは、父の弟と、就いていた職務をやめて協力してくれた郡さんという人であったと思う。但し実際の業務を開始するまでにはまだまだ難関は多く、地元のカイロ組合等からの反対も根強かったとされている。とにもかくにも昭和十一年に事業はスタートし、京都の宮家でも何回か利用して頂いたりしたが、最盛期はそう長

くは続かなかつた。昭和十二年日支事変がおり戦争へ国が一気に走り出してきた時代から、登山もだんだん廃れ鳩の餌も不足するようになり、財政的にも破綻して事業を撤収せざるを得なかつたようである。

## 三田旭夫の略歴

明治四十一年に東京品川海蔵寺にて二男五女の一番上の長男として誕生。父福田旭圃、母ヤス。寺の跡継ぎとして大切に育てられ、小学校から成績優秀で両親の自慢の息子であった。中学(旧制)は芝中に進学、在学中にマルクス思想に傾倒、文章を書くことが好きで文学サークルにも加わり、当時の流行作家であった南部修太郎の指導を受けた時期もあったようである。思想的に左傾すると共に宗教に対する反撥も強まり、最終的には大正大学の後に籍を抜いて三田家の養子となった。昭和五年に現在の杉並区下井草に家を建てて品川から移り住み、結婚した妻の幸子との間に一男二女をもうけるとともに、この地を最初の拠り所にして右にみた伝書鳩の事業に取り組みることになる。



軍用鳩の私下げ風景

機の設置、一方通行の設定等、身近な地域環境の改善のために活動をしていた。今にして父の一生を想う時、全く無償のいわばボランティアに終始した生涯だったのでないかとの感を深くするのである。(東京都在住)

山と博物館第43巻第2号

発行 一九九八年二月二十五日発行  
〒387長野県大町市大字大町八〇五六一  
大町山岳博物館

TEL 026-261-2101

印刷 大糸タイムス印刷部  
定価 年額一、五〇〇円(送料共)切手不可  
郵便振替口座番号 〇五四〇一七三三九三